

令和 3 年 8 月 17 日現在

機関番号：34405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02304

研究課題名（和文）上演芸術における「文化の編み合わせ」：1920年代パリの日本人アーティスト

研究課題名（英文）"Cultural Interweaving" of Performing Arts: Japanese Artists in Paris in the 1920's

研究代表者

長野 順子（NAGANO, Junko）

大阪芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20172546

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1920年代のパリの前衛劇場における日本人アーティストの関与について調査研究することから始まった。そこから見てきたのは、20世紀初頭の前衛劇運動の先導者達が日本の伝統芸能に強い関心を持ち、とりわけその仮面や人形振りや様式的な身体所作に、新しい演劇への示唆を見出していたことである。逆に日本人アーティスト達は、西洋的な演劇スタイルを学び、帰国後は日本の芸術文化の近代化に寄与することになったのである。ここから我々は、異なる芸術文化間の編み合わせの独自の様相を明らかにすることができた。また、これに関連して小規模な国際コロキウムを開催したことは、今後の展覧会実現へ向けた出発点となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は20世紀初頭の前衛劇運動における日本人アーティストの活動状況の調査を通して、西洋の演劇革新の試みが日本の伝統芸能の様式化された身体所作に強い関心をもっていたことを明らかにした。また彼らの帰国後の活動についても追跡調査し、そこに見られる「文化の編み合わせ」の独特の様相を浮き彫りにした。1920年代の一事象に焦点を当てながらも、こうした新たな身体表現の追求を現代アートにおける「パフォーマンス」的要素の胚胎という根本的テーマへとつなげる問題構制を含みもつところに本研究の学術的意義がある。また関連シンポジウムを開催することによりこの時代への関心を喚起し、企画中の展覧会実現への歩みを進めた。

研究成果の概要（英文）：This study started to inquire the involvement of Japanese artists in the avant-garde theatres in Paris. This inquiry made it clear that the pioneers of the theatrical innovation in early 20th century took a great interest in Japanese traditional theatres, particularly in their masks, puppet-like motion or stylized action, as a new method of body movement. In the reverse direction, those Japanese artists learned European theatrical culture, and contributed to the modernization of the Japanese performing arts. We can find here a peculiar example of "Interweaving of performative cultures". Furthermore, our small international symposium in 2018, related to it, provided a springboard for the exhibition in 2022 or 2023.

研究分野：美学芸術学

キーワード：前衛劇運動 伝統芸能 身体所作 仮面

1. 研究開始当初の背景

ドイツの演劇研究者エリカ・フィッシャー＝リヒテは「上演における諸文化の編み合わせ」(Verflechtung von Kulturen in Aufführungen)の代表例として、第5回パリ万国博覧会(1900年)を機に川上音二郎・貞奴らの公演がヨーロッパのアヴァンギャルド運動(演劇の脱文学化・再演劇化)に与えた刺激と、逆に当時の主流であった心理主義的リアリズム(例えばアントワヌの自由劇場)を取り入れた坪内逍遙や小山内薫らによる明治期の近代演劇運動とを挙げている(Erika Fischer-Lichte, *Theaterwissenschaft*, 2010:『演劇学へのいざない 研究の基礎』2013)。これらの周知の事例の他にも、こうしたプロセスは両大戦間に様々な形で存在し、それは現在進行中の芸術ジャンルの多様化や地域的拡大につながる現象であったといえる。

本研究は、フランスのシュルレアリストの女性写真家クロード・カーアンの独特なセルフポートレート写真及び20世紀初頭の前衛劇への彼女の関与についての研究から展開してきた。カーアンの終焉の地ジャージー島のアーカイブ及び出身地ナント市のメディアテーク他での資料調査の過程で、ナント大学の視覚文化論 P. Allain 助教授との研究打合せ中に、1920年代(Les années folles)の前衛劇運動の精査の必要性を確認した。その後フランス国立図書館(BNF)でThéâtre ésotérique及びLe Plateau等の実験的な小劇場関連の膨大な microfiche を閲覧中、日本人による舞踊や演劇への関与を発見した。とくに1929年6月に催されたLes artistes japonais(Toshi Komori, Yasoshi Wuryu, Yoshinori Matsuyama)による歌と踊りの夕べ“Gala oriental”の詳しい演目や新聞評等から、従来のリアリズム演劇を脱構築する一手法として日本の能や歌舞伎、東洋の舞踊等の様式化された身振りへの関心があつたことが見えてきた。また、これらの人物の周辺にも他の分野の日本人アーティストで前衛運動に様々な仕方に関わつた人々が存在することが分かった。彼らの多岐に亘る活動を、領域横断的に、また多種の資料や記録を通じて精査することで、この時代を特徴づける異文化間の相互作用としての「文化の編み合わせ」の独特なあり方が見いだされる可能性が出てきた。

2. 研究の目的

19世紀以来ヨーロッパの文化・芸術の中心地となったパリでは、20世紀に入って前衛劇場での実験的試みが沸騰した。とくに古代及び東洋の仮面/人形劇のような脱人間的な動きで演劇の「再演劇化」を図ろうとした1920年代の小劇場運動には日本人アーティストも関与していたが、その実態はよく知られていない。彼らは様式化された身体表現によって新しい運動に寄与し、また自らのパフォーマンスも変容させていった。帰国後は近代芸術の普及に努めた者もいる。本研究の目的は、彼らの活動を埋もれた諸資料から掘り起こし、この時期に特徴的であった芸術諸ジャンルの交差とともに、「文化の編み合わせ」の独特の様相を浮き彫りにすることにあつた。

20世紀初頭にはアメリカやドイツに渡つた人々(ex.石井獏、伊藤道郎)もいるなかで——また30年代になってパリに赴いた人物(ex.岡本太郎)もいたが——、「狂乱の時代」と呼ばれた1920年代のパリにとどまつた上記の人々は、生活の糧を求めながらも、前衛運動のただ中に巻き込まれていた。本研究はまず、エゾテリック劇場の舞台上で「浦島」「猩々」等の舞踊劇、山田耕筰作曲の舞踊詩や童歌を上演した小森敏(1887-1951)、瓜生靖(1893-?)、松山芳野里(1891-1974)のパリでの活動を中心に、当時のプログラム、新聞や雑誌の評論記事、埋もれた手記等の諸資料を詳しく追跡・調査する。さらに彼らと何らかの形で共同活動をした諸ジャンルの日本人アーティストの動向と、また日本における芸術の近代化への彼らの寄与について調査・考察する。それらを通して、そこから浮かび上がってくる「文化の編み合わせ」の様相を明らかにすることが本研究の最終目的となる。

3. 研究の方法

カーアン研究者 F. Leperlier は3名の日本人アーティストに言及してはいるが(Claude Cahun, *L'Exotisme intérieur*, 2006)、当時のカーアンの活動と関連する限りでの情報しか得られない。「小森」に関するほぼ唯一の情報源である茂木秀夫『小森敏とパリの日本人—近代日本舞踊の国際交流』(2011)にも前衛劇や瓜生らへの言及はほとんどない。舞踊評論家 A. Levinson は大著(*La danse d'aujourd'hui, études, notes, portraits*, 1929)で、小森と芦田栄の東洋的な舞踊を称賛している。1927年頃パリに滞在した写真家中山岩太は中国風衣装の「浦島」を踊る小森の姿を明暗の効果とともに撮影している。「瓜生」についてはプラトー

劇場に「日本人」役や女役等で出演した他、1927年の『修禅寺物語』フランス語版 *Le Masque* に狂女役で参加したこと以外は不明である(後者の舞台装置は藤田嗣治が担当した)。他方テノール歌手の「松山」は帰国後音楽舞踊院を設立して後進を育成した。小森も1937年に舞踊研究所を設立した。1930年代に日本で発行された雑誌『あみ・ど・ぱり』にその動向は多少窺える。

以上のことを踏まえて、主に次の項目についてフランス及び日本における資料調査を行う。

- (1) 仮面や人形振りを強調するフランスの前衛劇の系譜(『ユビュ王』1896、『パレード』『ティレシアスの乳房』1917、『ダダの夕べ』1923等)。
- (2) ヨーロッパの前衛劇運動を牽引することになった G.クレイグの理論及び演劇雑誌『仮面』*The Mask* による影響の拡がり。クレイグのイギリスでの位置づけと友人達との関係。
- (3) 前衛劇場であるエゾテリック劇場 *Théâtre ésotérique* とプラトー劇場 *Le Plateau*(この二つにはクロード・カーアンも参加していた)に関与した日本人アーティストの活動の詳細、及び前衛劇・実験劇における東洋の演劇・舞踊の位置づけ。
- (4) 未来派パントマイム劇場等への舞踊家小森敏(及び写真家中山岩太)の関与と帰国後の活動。松山芳野里のパリでの作品と帰国後の活動。
- (5) シャンゼリゼ劇場 *Comédie des Champs-Élysées* での F.ジェミエ演出『修禅寺物語』フランス語版上演状況と藤田嗣治ら日本人による関与。及び藤田のパレエ・スエドワのための舞台装置や衣装の仕事。その他。

その上で、これらの多ジャンルに亙る日本人アーティストの活動から、この時期のヨーロッパ文化と日本文化の間の「編み合わせ」の特徴について浮き彫りにしていく。

4. 研究成果

1920年代パリの前衛劇運動への日本人のアーティストの関与の状況について、以下のような調査と研究を行った。

- (1) 仮面や人形振りを強調するフランスの前衛劇の系譜を辿り、原初の非日常空間の現出によって本来の演劇的エネルギーの復活を図ろうとした試みを考察した。象徴主義文学の運動から生まれた前衛劇の系譜は、A.ジャリの『ユビュ王』*Roi Ubu* に始まる。1896年のその初演で大きな仮面を被って主役を演じたのは、若き日の F.ジェミエであった。その後彼は、アントワヌ劇場を経てオデオン座の支配人となり、1927年に国際演劇祭の一環として新歌舞伎『修禅寺物語』のフランス語版『ル・マスク』*Le Masque* の上演を企て、ここでは演出を担当するとともに主人公の面作師・夜叉王を演じるようになった。
- (2) 19世紀以降のジャポニスム以降、フランスだけでなくイギリス、ドイツ諸国に及んだ様々なかたちでの東洋の芸術文化の受容が西洋近代の伝統的芸術文化を変革する上でひとつの突破口を与えてきた。イギリスの演出家 G.クレイグは日本の伝統芸能に注目していたが、1900年前後に欧州公演を行っていた川上一座や花子一座に対しては死の場面の表現等に批判的であった。彼がとくに関心をもっていたのは、能楽の舞台づくりや能面とともに制御された身ぶりや足運びである。その点で、当時 E.パウンドや野口米次郎に触発された詩人 W.E.イエーツの能への傾倒とも共鳴していたことがわかってきた。さらに、クレイグは演劇雑誌『仮面』(1908-29)を中心とする評論活動によってフランスの前衛劇にも多大な影響を与えたことが、クレイグのモノグラフやフランス演劇人の記録などから明らかになってきた。
- (3) 前衛劇・実験劇に参加した日本人アーティストである小森敏、瓜生靖、松山芳野里らの活動状況についての調査の結果、舞踊家小森敏は多くの劇場で東洋風の舞踊を披露し、また未来派パントマイム劇場(中山岩太の撮影した舞台写真が複数ある)他へも参加した。声楽家松山芳野里はパリで作曲し自ら上演した『五つの日本の歌』*Cinq chansons caractéristiques japonaises* をスナール社より出版した(その楽譜は和歌山県立図書館に併設の南葵文庫にて直接閲覧でき、当時のスナール社楽譜に関する研究者との研究交流も意義あるものであった)。小森と松山はそれぞれ帰国後、舞踊研究所と音楽舞踊院を設立して後進の教育に専心している。瓜生靖については、歌舞伎役者澤村宗十郎の弟子として澤村遮莫という名をもつ元歌舞伎役者であり、いくつかの劇場で活動を続けていたが、帰国後の動向については(ある書物に訳者としてその名が記載されている以外は)不明である。
- (4) 瓜生靖は、1927年シャンゼリゼ劇場における岡本綺堂作『修禅寺物語』(新歌舞伎)のフランス語版公演でもう一人の日本人山田五郎(1907-1968、金春流の能や西洋舞踊を学ん

だ後渡米、パリでの公演参加の翌年に帰国し舞踊研究所を設立して日本の舞踊界を牽引した)とともに「狂女」役で参加した。彼は J.コポーが創立したヴィユ・コロンビエ劇場で芦田栄と舞踊公演を行っていた(当劇場での「東洋の舞踊と歌」の公演における日本人(瓜生と芦田)の出演記録が確認できる)が、共演者・芦田が急死したあと、P.アルベール=ピロに頼んで彼の前衛劇場に参加した。アルベール=ピロは、1917年のG.アポリネール作『ティレシアスの乳房』の演出を担当し、前衛雑誌 *SIC* を発行していたが、1929年に『プラトール劇場』を立ち上げた。彼は瓜生のために二つの作品(短編『沈黙』*Silence* と『郊外』*Banlieue*)を作った(Cf. Marianne SIMON-OIKAWA, 'L'allumette et le pyrogène: le Japon de Pierre Albert-Birot')。『郊外』で人形風の演技をする「日本人」le Japonaisの役は、のちにクロード・カーアンが引き継いだ。

(5) 1927年のシャンゼリゼ劇場での『ル・マスク』公演では舞台美術と衣裳を、その頃パリでの活動が軌道に乗っていた藤田嗣治が担当した。この上演についての当時の記録や新聞等での批評記事では概ね好評であった。藤田はフランスに渡る以前から帝国劇場他でいくつもの舞台美術に関わった経験をもち、日本風の景色や建物を描くことにも慣れていて、また1923年には能楽研究者 N.ペリのパリでの追悼記念に略式で演じられた能の背景に松の絵を描いたのも彼だとされている。藤田はまた1924年には、バレエ・リュスと競っていたバレエ・スエドワ(スウェーデンバレエ団 Ballets suédois)の後期作品《風変わりなコンクール》*Le Tournoi singulier*の舞台美術と衣裳を担当した。古代神話と近代的なスポーツとが交錯する奇妙な物語のための象徴的な舞台装置とやや東洋的な衣装は彼独自の趣向であった(Cf. 佐野勝也『フジタの白鳥』他)

(6) 上記の諸テーマと関連する企画として、2018年3月10日にシンポジウム「クロード・カーアンとその時代」をアンスティチュ・フランセ関西・京都稲畑ホールにて開催したことは、大きな成果をもたらした。小規模ながらこの国際シンポジウムでは長野の主旨説明のあと、前衛芸術運動のなかでのカーアンの特異な活動について研究者2名(永井敦子(上智大学)、Patrice Allain (Université de Nantes))の報告があり、フロアとの活発な質疑応答も実りあるものであった。

また、このシンポジウムをきっかけに愛知県美術館における「クロード・カーアン展」の計画が浮上した。しかしながら諸事情を重ねて2020年以降のコロナ禍により、その実現は2022年以降に延期されることになり、現在は再びその準備を進めている。

19世紀後半のジャポニスム以降、フランスだけでなくイギリスや他の国々にも及んだ様々な形での東洋の芸術文化の受容が西洋近代の伝統的芸術文化を変革する上でひとつの突破口を与えてきた状況全般が、以上の具体的な資料調査から見えてきた。1900年パリ万博前後の日本人の欧州公演での歌舞伎風の身体所作への反響に次いで、とくに「狂乱の時代」*Les Années Folles*と呼ばれた1920年代を中心にパリで前衛芸術運動に関与した日本人アーティストの独特のパフォーマンスは特筆すべきである。同時にまた、日本に帰国した彼らが今度は日本の芸術文化の近代化=西洋化に寄与することになり、ここにこの時代に特有の「文化の編み合わせ」現象が見られた。こうした事柄と連関して、とりわけ伝統芸能である「能」についてイギリスやフランスでの様々な研究や翻訳の試みにもとづく実践的な関心が文学界や演劇界に高まってきた経緯を明らかにすることが、次なる課題として浮上してきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 長野順子	4. 巻 第24号
2. 論文標題 1920年代フランスにおける『能』の受容をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪芸術大学大学院『藝術文化研究』第24号	6. 最初と最後の頁 159-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長野順子	4. 巻 41
2. 論文標題 「幻想小説」から「幻想オペラ」へ（2） 鏡像喪失の物語を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪芸術大学紀要『藝術41』	6. 最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長野順子	4. 巻 41
2. 論文標題 「幻想小説」から「幻想オペラ」へ ファンタスティック をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪芸術大学紀要『藝術40』	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長野順子	4. 巻 47
2. 論文標題 カントにおける美醜の判断 - 生活感覚からの検証という視点 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 武庫川女子大学生生活美学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 59-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長野順子	4. 巻 63巻2号
2. 論文標題 森佳子『オペレッタの幕開け オッフェンバックと日本近代』紹介	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本音楽学会『音楽学』	6. 最初と最後の頁 160-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 長野順子
2. 発表標題 仮面 をめぐる変奏 20世紀初頭の前衛劇運動における「能」の受容
3. 学会等名 関西シュルレアリスム研究会第26回研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長野順子
2. 発表標題 シンポジウム「人形あるいはヒトガタ (anthropomorphos) の魅力 - 人形・彫刻・フィギュア等の境界を越えて -」にて口頭発表「自動人形の歌と踊り」
3. 学会等名 日本美学会西部会第317回研究発表会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 長野順子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 206
3. 書名 ホフマン物語 ホフマンの幻想小説からオッフェンバックの幻想オペラへ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 シンポジウム「クロード・カーアンとその時代」Symposium : Claude Cahun et son époque	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------